

「パン運搬当番」。二〇一〇年に閉校した岡崎市北東部の旧千方町小学校には、地域の歴史を感じさせる木札が残っている。



旧額田町で学校給食が始まった昭和三十年代、山深い千方町小には給食のトラックが来ず、親たちが毎日交代でパンを運んだ。十五キロものパン箱を背負

三河だより

パン運び

い、標高差二百五十メートルの急坂五キロを上る。「大変だね」

て思ったことは一度もなかった。地元の平松秋子さん(百歳)は振り返る。「子どもたちがおなかをすかせて待っていると思うと、とにかく時間に間に合わせようと必死だった」

木札には、当時の集落の住民たちの名前が当番順に記されている。「もうほとんど亡くなったね」。学校を共に支えた懐かしい人たちの名前を何度も指でなぞった。(森田真奈子)